

東北次世代がんプロ養成プラン セミナー実施報告書

(セミナー名称) 東北大学大学院医学系研究科がん看護学分野主催 9月がん看護勉強会 事例報告者 : 山家 良太 所属 : 東北大学大学院がん看護学分野 テーマ : 終末期がん患者、家族の意思決定支援	
担当者氏名 : 佐藤 富美子 教授	所属 : 東北大学大学院がん看護学分野
内線 : 7926	Email: fsato@med.tohoku.ac.jp
1. 実施年月日 :	
令和 元年 9月 30日	
2. 開催場所 :	
東北大学医学部保健学科D棟 217号室 がん看護学分野カンファレンス室	
3. 関連分野 :	
終末期がん看護、意思決定支援、家族看護、子ども支援	
4. 対象者 :	
がん看護に興味関心のある医療関係者・大学教員・東北大学大学院医学系研究科保健学専攻学生・東北大学医学部保健学科学生	
5. 参加人数 : (お分かりの範囲で内訳をお知らせください。教員、学生など)	
大学教員 4名、大学院生 5名、学部学生 2名(看護学科 1名、医学科 1名)、看護師 3名 計 13名(うちがんプロ修了のがん看護専門看護師 4名)	
6. 成果 :	
<p>今回の事例報告は、56歳男性、腓頭癌、リンパ節転移、腹膜播種の患者の療養先の選択に関する支援について検討を行った。報告者は、緩和ケア病棟に勤務する看護師であり、最後を過ごす場所の選択に関する意思決定支援に苦慮した事例である。</p> <p>事例は、妻と2人暮らしであり、3人の娘がいる。子はそれぞれ結婚し、中学生～未就学の孫がいる。患者は、2018年夏頃より嘔吐が出現し、上記診断となり、腓頭十二指腸切除術後に化学療法をおこなっていた。しかし、腫瘍増加がみられBSCとなり自宅で療養していた。辻褄の合わない言動によりせん妄と判断され、緩和ケア病棟に入院となった。</p> <p>入院後、向精神病薬で症状は軽快したが、嘔気と浮腫による身体的苦痛が残存していた。浮腫により、採血やアルブミン投与、輸血は困難と判断され、実施されなかった。看護師より最後の場所について確認されると感情失禁があるも、決定できる様子ではなかった。自宅に帰りたいという希望があったが、エレベーターなしの5階建てマンションの5階に住んでいることや、妻が日中仕事による不在による状態確認ができない懸念により、在宅療養ではなく外出を行って過ごしていた。意識レベルの低下が進行し、患者が医師に余命を確認した。その後、看護師同席のもと妻と娘に感謝の思いを伝えた。患者より、孫への告知について、どのように伝えたらよいかと相談があり、伝えてもよいこと、余命だけではなく孫に伝えたいことを合わせて話したらどうか提案があった。さらに、家族には孫の変化について注意するよう説明を行った。その後、患者は孫に伝えることができ、孫付き添いのもと看取りとなった。</p> <p>以上の報告を基に、この倫理的課題と看護援助についてディスカッションを行った。ディスカッションをもとに明確になった報告を受けた事例の1点目の課題は、事例の症状マネジメントが十分に行われた状況での意思決定支援に至っていない点である。医学的知識を兼ね備えた苦痛緩和が求められる。2点目は、患者が希望する在宅療養を叶える支援がなされていない点である。社会資源の積極的な活用が求められる。3点目は、孫への支援</p>	

である。孫は日々患者に面会に来ていたことから、病状悪化について認識していくことができたと推測される。告知時には、親が子どもの揺れに対応する能力があるかが重要なポイントとなる。孫に直接、気持ちや様子を聞いてみることで、孫の変化を捉えることが重要となる。

以上を参加者で共有した。来月は、MD アンダーソン研修を受講したがん看護専門看護師による報告を元に本邦における課題を検討していく予定である。

【当日の会場の様子などの写真がございましたら、添付ください】

